

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0970400750		
法人名	社会福祉法人報徳会		
事業所名	グループホームあゆ		
所在地	栃木県佐野市仙波町504-6		
自己評価作成日	令和 2 年 8 月 11 日	評価結果市町村受理日	令和 2 年 10 月 12 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホームは郊外の山間の自然豊かな環境の中に位置し、近くには小学校があり子供たちと触れ合う機会が多くあり、交流は利用者の励みともなっている。「一軒の家」として町会に所属し15年が経過しようとする現在ではコミュニティが残る町会は利用者を支えてくれる最大の資源となっている。ホームで開催している運営推進会議や地域交流会や防災訓練等には多くの方の参加があり応援者となっている。認知症になっても自分らしく有する力を発揮しながら地域で暮らし続けられるよう、職員各々が地域と支え合える関係作りにも努めている。コロナ禍において交流は中止、面会は自粛の状況であっても利用者を和ませる温かな心遣いが寄せられる施設である。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は佐野市北部の閑静と自然豊かな環境にある。近くの小学校からはプランターに花を植えに来てくれ、利用者のふれあいと、町内会のレクリエーション参加も楽しみの一つになっている。地域運営推進会議では書面会議において、避難訓練への提案が出され、拡声器を使用した訓練は良い効果が得られた。地域の人においては熱中症予防にと梅干しの提供があるなど「地域の家」としての存在が現れている。職員は「自分らしくゆっくりとゆとりを持って暮らしたい」と言う理念を心に刻み、高齢化が進んできた地域のゴミステーションの清掃を担当するなど、地域に根ざし、地域協力の下、利用者が安心安全に生活が送れるようケアしている施設である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	令和 2 年 8 月 31 日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「自分らしくゆっくりとゆとりを持って暮らしたい」という理念は利用者、職員の思いとして捉え、月1回の会議において、各々の取り組みを振り返り改善すべき点を話し合い理念の共有と実践の取り組みを日々行っている。	理念は玄関に掲示してあり、開所時に職員の思いに添って作成された。理念の実践に取り組み、毎月の会議では実践状況を話し合い再確認を行っている。職員には再度理念について説明をするなど、日々理念の共有と実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、地域の行事に参加するなど、地域とのつながりを大切にしている。毎週ゴミステーションの清掃を行い、地域活動や地域の人々との交流に積極的に努めている。コロナ禍によりボランティア受け入れは中止している。	自治会に加入し、地域の一員として様々な行事やゴミステーションの清掃を行い、地域との繋がりをもっている。防災訓練の通知を配布したり、近隣からは梅干等季節の物の提供があったり、小学校からはプランターに花の植え込みに来るなど、地域の家となって交流に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域住民より認知症の問い合わせや相談には助言や情報提供を行っている。地域に向けた広報誌などで小学生と交流の写真や避難訓練で地域の人々と協力合っている写真、地域の人々とグループホームでの茶話会の写真等で認知症の方がどのように過ごしているか伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域の方々の協力を得ながら、2ヶ月に1回以上定期的に開催している。発展的な意見やアイデアが多く出され、事業所のサービス向上につながってきたが、コロナ感染拡大防止の為、実情を伝える書面開催となっている。	コロナ禍で地域運営推進会議は書面開催であったが、参加者の中には書面を持参して議題に沿った意見があり、地域住民には教えて貰う事も多い。2ヶ月に1回の会議も、防災避難については拡声器使用の提案があり、実際近隣の周知に効果が大きく、地域の災害・防災情報を共有して、災害対策につなげている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市職員とは日頃から声を掛け合い何でも相談できる関係を築いている。昨年度は防災面で、今年度は感染症面で情報共有に努めるなど連携を深めている。	市職員とは、日頃から顔見知りとなり話しやすい関係ができています。防災に関する書類を作成し検討して貰ったり、新型コロナウイルス感染症予防対策チェック表による確認と再検討の指示を受けるなど、市からの情報共有に努め協力関係を築くよう取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	カンファレンス時や折に触れ身体拘束をしないケアの意識を高めあっている。家族から安全のための拘束の要望があっても拘束による弊害を説明したり、センサーマットを導入し安全の確保に努めている。特に言葉による拘束に注意を払い自由な暮らしを支援している。	管理者が、身体拘束についての提案をしたり、法人でも研修委員会があり、職員が参加して身体拘束しないケアについて理解を深めている。3人の利用者がセンサーマットを使用し安全が守られるよう努めている。言葉の拘束については職員同士が常に遠慮なく注意しあえる良好な立場関係にあり、身体拘束しないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連に学ぶ機会を持ち、事件が報道された時などは職員間で話し合うようにしている。 利用者を敬う言葉遣いから始まり、職員一丸となり虐待防止に努めている。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員は人間としての尊厳を大切に不当な人権侵害からは、その人を守るよう努めている。未だ、活用に至るケースはないが、直に支援に繋がれるよう努めたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不安や疑問が生じていないか訪問時や電話等で尋ねるようにし納得のいくよう説明している。特に、家族の経済・身体的不安には十分な配慮を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	居室担当を決め、担当職員が自身の写真入り手紙を家族に送り親近感を抱いてもらい、来所時に意見・要望を聞いている。「家族報告書」を活用し、大切な情報は共有し運営に反映している。	月1回の利用料支払時に家族等から意見・要望を聞くようにしている。毎月の居室担当者会議で、利用者の何気ないつぶやき・要望を受け止め意見を出し合い、職員同士家族報告書にて共有し、大切な情報として運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は月1回の主任会議や代表者訪問時などに聞いてもらえるようにしている。職員が提案してきた事は検討し反映させている。その結果、業務の見直しを行い、処遇にゆとりをもたせることができている。	管理者は日頃から職員と話しやすい関係を築いている。常に職員との会話により健康を把握したり、ケアの問題点や処遇・提案についても検討して見直しを行い運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準は常に佐野市内の他の介護保険施設の情報を収集し、管理者及び従業員が働きやすい水準に努めている。また、毎月処遇改善加算を支給し、給与の引き上げも行っている。労働時間等も適正に管理し職員個々の勤務状況を把握し過剰労働にならないように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりの力量を把握したうえで法人外の研修を受ける機会を作るよう努めているもののコロナ禍の為、機会がないのが実情である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者同士の交流はあるが、職員同士が交流する機会は今は出来ていない。他施設での月一の研修会も開催されないのが実情である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	自宅を訪問し、心理的抵抗を理解し、共感姿勢で傾聴するように努めている。自宅に代わる暮らしの場として本人が安心し、落ち着けるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅を何度か訪問し、困り事を傾聴し、援助内容を話し合い、来所してもらいホームの環境・雰囲気を感じて頂き、安心してもらえるよう十分なサービスの提供に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所申し込みに来所された本人家族等の話を傾聴し、十分な支援の提供が困難と判断された場合は、他のサービスの情報提供を行う等、柔軟な対応を心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	昔の風習や智恵など利用者に教えられることも多い為、職員一人ひとりが利用者の個性や能力を大切にすることに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	写真入り状況の手紙や誕生日を一緒に祝ってもらったり、一緒に散歩に出てもらったりしている。容態変化時には受診に同行してもらおうなどの取り組みを行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	介護度が上がり、馴染みの場所等への訪問が難しくなっているが、家族の協力を得ながら、馴染みの人や場所とのつながりを継続できるよう努めているが、コロナ禍の為、外出は禁止の状況である。	コロナ禍で利用者の介護度が上がり、馴染みの場所への訪問は困難になって来ているが、事業所近くの理美容室の方々が散髪に来られたり、家族の協力により馴染みの友人とのつながり継続ができるよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	自然とテレビの前に集う関係作りを築くと共に食事時や外出時の座席位置などは、入居者同士の関係を配慮している。随時職員間で話し合い、良好な人間関係作りに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終了後も病院施設等を訪れ本人に面会したり、家族からは電話にての今後についての多くの相談が寄せられる為支援に努めている。終焉の時には必ず会いに行くようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりの思いを把握するために、職員は常に察することに努めている。日常のケアの中での仕草やつぶやきを細かく記録しており、職員同士で意向の把握と共有をしている。	利用者の日頃の会話や表情・思いを、職員は細部にわたり把握することに努めている。入浴支援中の仕草やつぶやきなど、職員間で情報を共有し、利用者の思いに添った支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	自宅を訪問し、生活歴や暮らし方、環境の把握に努めると共に、利用したいサービス事業者からの情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の支援の中で職員の気づきや意見を個人記録や医療ノートに詳しく記録し周知合っている。業務日誌の中で申し送り、確認合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は協力医、家族と本人の意向・希望を基に、日々の記録や状況報告書を参考に作成し、年2回見直している。利用者担当職員が課題を見出し、話し合いの機会をもち、身体状況に変化が生じた場合はその都度現状に応じた介護計画を作成している。	本人・家族の意向や希望と協力医の往診時診察状況を聴き止め、日々の生活記録や状況を基に介護計画を作成している。定期的な見直しは6ヶ月毎であるが、月1回の担当者会議を参考に身体状況に変化があればその都度現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	様子や気づき等、個人記録に細やかに記録するようにし、業務日誌にて工夫や実践、結果をカンファレンス時に情報を共有し、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	外出・外泊時の迎えの時間の変更や食事の変更にも柔軟に対応すると共に、家族も一緒に食事を摂れる様に対応しているほか、病院や買い物に同行している。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が安全かつ豊かな暮らしを楽しめるよう、消防署・駐在所・小学校との交流や地域の人たちの力を借りた取り組みを継続的・計画的に行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者・家族の了承を得て、協力医をかかりつけ医としている。受診状況、服薬管理等について、家族と情報を共有し、皮膚科・眼科等の受診の際は、家族や職員が通院介助を行い、利用者の状況を適切に伝えている。	かかりつけ医は利用者、家族了解のもと、ほとんどの利用者が協力医の受診をしている。家族付き添いの受診については、支援経過を連絡メモにして適切な医療を受けられるよう支援している。皮膚科・眼科の受診は職員や家族が通院介助をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場には看護職の配置はないが、法人の看護が相談に乗ってくれ対応に当たってくれている。主治医の看護師も相談に乗ってくれ、主治医と連絡をとり指示をしてくれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	主治医が状態に応じて、入院先病院の手配をしてくれる。担当医、担当看護師と入退院共通連携シートにて情報交換するなどしている。本人・家族の意向に添うよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用開始時に、看取りについての事業所の考え方、可能な対応について家族に説明している。状況が変化した場合には、その都度家族と話し合い、医師との連携のもと、利用者にとって納得のいく時間を過ごせるよう支援している。	終末期の在り方は利用開始時に説明している。今まで看取りの経験もしており、利用者家族から看取りの要望もある。主治医からは終末の状況を細かく聴いて居り、職員同士も細かく観察し状況の変化にも対応できるよう医師との連携もとれている。最高齢の方には、水分・流動物が摂取できるようケアし、本人、家族等の希望に寄り添った支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時対応の手引きを所持し、各々が心得ているようにしている。救急救命講習会に参加させている。しかし、迅速に対応出来るスタッフと出来ないスタッフの差があるのが実情である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急時のホットラインを整備し、近隣住民にも登録してもらっている。地域住民の協力を得て、拡声器を使用した避難誘導訓練を実施するなど、連携体制を築いている。台風19号の時を教訓に早期避難を心掛けている。	緊急時のホットラインには、葛生ホームと近隣住民が登録され非常時に備えている。地域に避難訓練参加の案内を配布し、防災訓練には地域の方6名の参加があった。昨年の豪雨避難を教訓に、避難誘導時間を測定したり、職員も消火器訓練を実施、緊急避難袋の準備等、早期避難を心掛けて、地域との連携体制を築いている。備蓄もしている。	地域との協力連携体制も大変良い関係になっているが、夜間は職員が手薄になっていることから、夜間想定自主避難訓練を取り入れることで、より安心安全な避難が出来ることに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の人格を尊重し、プライバシーに配慮した接遇を心掛けている。さん付けで名を呼び、トイレ誘導の声掛けも適切に行っている。利用者の居室に花の名を付け、利用者を表すのに花の名で呼ぶことでプライバシーを守る工夫をしている。	一人ひとりのプライバシーに配慮した、声かけ誘導を行い、名前も丁寧に「さん」付けで呼んでいる。トイレでの介助にも配慮し汚物の処理は利用者が立ち去った後等にさりげなく行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来る限り向き合い傾聴に努めている。決めつけず尋ねてから、或いは選択してもらってから行うようにしている。しかし、思いが汲み取り難い時があるのも実情である。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先するのではなく、利用者のペースに合わせゆとりを持って対応するようにしているが、精神・行動障害のある利用者の対応に追われてしまうのも実情である。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪染めの支援、長年使い慣れた化粧品を切らさない支援、本人が好む洋服購入の支援などを行っている。居室担当者が洋服の整理等を一緒に行うようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	同じ法人の栄養士が作成した献立に利用者の状況や好みを加えたり食材購入している。郷土料理や行事食を利用者は楽しみにしている。下ごしらえ、食器拭き、テーブル拭き等無理のない範囲で行っている。	同法人の栄養士による献立を参考に、週3回利用者と一緒に食材の買い出しをしている。郷土料理である、そばや耳うどんなどは楽しみの1つである。調理台も低くなっており利用者は食器拭きなど進んで行っている。職員は声をかけながら楽しむ食事ができるよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	法人の栄養士の指導を仰いでいる。細かい食事・水分チェックを行っている。ミキサー・とろみ食・ワンプレート提供を行っている。牛乳・乳酸菌飲料は欠かさず毎日提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、除菌液にてうがいや歯磨きをしてもらっている。ブラシを拒否される方にはスポンジブラシで対応している。毎晩、義歯洗浄剤にて除菌を行っている。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、排泄パターンを把握して声掛け誘導しながらトイレでの排泄を促している。オムツ使用を減らし、リハビリパンツ・パット使用で排泄の自立に向けた支援をしている。夜間は無理せず、ポータブルトイレを使用している利用者もいる。	利用者の排泄パターンを把握し、さりげない声かけ誘導でトイレでの排泄を促している。一人での自立排泄では職員は何気ない視線で見守りしている。リハビリパンツ・布パンツ・パットなど様々であり、夜間ポータブルトイレを使用する方もいる。利用者の状態に合わせた自立支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄表により、排泄パターンを把握し、声掛け誘導を行い、便秘予防の運動・腹部マッサージを行うつつ、多めの飲水の促しや食物繊維摂取の工夫をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は週2～3回午前中を基本としている。失禁時にはシャワー浴で清潔を保っている。利用者がリラックスされるので本音や思いを聴く場となっている。入浴剤を活用したり、苜蒲湯やゆず湯で入浴を楽しめる支援をしている。	入浴は掛け流しで、週2～3回午前中を基本として見守り介助で支援している。利用者それぞれの思いに耳を傾け、ゆったりと安心して入浴できるようにしている。入浴剤や季節感を味わう苜蒲湯・ゆず湯で楽しめるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休みたい時に居室に戻り休んでもらっている。就寝・起床時間には一人ひとりに合わせ対応している。ほとんどの利用者が時間を見ながら行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の説明を個々にファイルし理解し合っている。薬変更時は医療ノートに記入し、症状の変化に注意を払い様子を観察するように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴などの情報や本人の希望をもとに飲みたい、食べたい物を提供している。カラオケ、テレビ、散歩一人ひとりの楽しみ方を大切にしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じての外出支援、町内のレクリエーションや小学校の行事等へ参加実施。家族・地域住民の協力による外出・外泊の機会などがあつたがコロナ禍により自粛の状況である。	季節に応じた外出も利用者・家族の楽しみであったが、利用者の高介護度とコロナ禍により、近場や毎日の散歩になっている。以前は、学校での行事参加、家族協力による外出、道の駅での外食など楽しみの1つであった。	

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ほとんどの方が管理者・家族が管理している。お小遣いの中から小銭を所持し使えるよう努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	以前の利用者には支援していたが、現在の利用者にはその訴えがない為、行っていない。近況報告の言葉や、写真を添える等の支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間には利用者の笑顔の写真や、小学生から送られた作品などが飾り付けられている。行事(正月・節句・七夕・クリスマス)にあった飾り付けもされる。散歩に出掛け、摘んできた花を飾るなどし、季節感も味わってもらっている。天窓から柔らかな明かりと自然換気を取り入れ落ち着いた環境作りにも努めている。	リビングは天井からファンが回り、天窓も時々開閉されて換気している。壁面には、小学生からの飾り物や季節に添った行事の写真が掲示してある。テーブルサイドにソファが配置され、ゆったりと寛げる場になっている。台所配膳台も利用者が無理なく出来るよう低く設置されるなど利用者にも添った環境作りに努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳6畳半の「なごみ」という部屋があり、前庭の花や植木を眺め一人静かに過ごす事が出来たり、ソファが配置され気の合った利用者同士が過ごせたりと、思い思いの場所で過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の畳スペースは、家族の来所時等にもゆとりと過ごせる場となっており、職員が毎日掃除している。職員は、常に利用者の安全をチェックしながら、その人らしく居心地良く過ごせる居室作りを支援している。	居室は日当たりの良い3畳ほどの寛げる畳とフロアになっており、備え付けタンスとベッドは事業者の物である。寝具や小物品・写真・ぬいぐるみなど馴染みの物を持ち込み、居心地良く安心して過ごせるよう支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアの壁・トイレ・浴槽には手すりを取り付けている。トイレマークだけでなく手書きでトイレと示している。居室が分かるよう目線に合わせ花のマークが付けられている。		